

四天王寺所蔵 聖徳太子絵伝六幅本における妃の行方
——注釈書に見る太子伝と絵伝の相関——

鈴木 照葉 (慶應義塾大学)

聖徳太子絵伝とは、太子一生涯の事跡を描いた高僧絵伝の総称である。従来この絵伝の諸本については、太子伝と総称されるテキスト情報との密接な関わりの下に生み出された、という指摘が繰り返されている。ただし、絵伝の図像とテキストの結びつきを、実作例の検討の積み重ねにより繙く研究については、未だ検討の余地を残すものと考えている。本発表は、四天王寺蔵の六幅本《聖徳太子絵伝》について、その図像上の特質に着目しつつ、太子伝と絵伝の強い相関について再提起することを目的とするものである。

当該の絵伝は、紙背文書により南都絵所松南院の遠江法橋が元亨3年(1323)に制作したと伝える、太子絵伝の中でも貴重な基準作である。今日まで、南都系太子絵伝の一作例として主に認識されてきた本作であるが、仔細に図像を確認すると、他本には見受けられない後補による改変が確認できることが判明した。とりわけ注目すべきは、第六幅の最下段、太子五〇歳薨去の場面における妃の不在である。太子伝の集大成とされる『聖徳太子伝暦』(以下、『伝暦』)によれば、太子が五〇歳で亡くなる折に、最愛の妃である膳姫がともに同床に伏したことが記される。これに従い、通常は絵伝における当該場面で妃と太子とが横たわった姿で同日に薨去するという図像、いわゆる同日薨去の図像が描かれている。ところがこれに対して四天王寺本の絵伝では、本来同日薨去として描かれていた太子傍らの妃の姿のみが、上から塗り消されているのである。この改変の結果、絵伝に太子と妃との薨去が異なる、異日薨去の図像が登場した。同様の作例は本作例のほか、橘寺蔵の八幅本《聖徳太子絵伝》のみに留まる。したがって、これら異日薨去が絵伝にあらわされた一つの要因として、太子伝注釈書の諸活動があったことを具体的に指摘したい。

『伝暦』の記述には、それまでの太子伝諸本の内容を集約したために一種の矛盾が生じたとみられ、中世以降に盛んに制作された太子伝注釈書諸本はこれを正そうと試みたものとみることができる。この活動を先導した筆頭寺院としては、四天王寺や橘寺など太子ゆかりの建立寺院の名を挙げるができる。なかでも、四天王寺における注釈書である『太子伝古今目録抄』の記述に焦点を当てることで、四天王寺が太子薨去の場面に対する独自の解釈を有していた事実を明らかにし、本絵伝における図像の改変にあたっては、そのことが大きく反映した可能性を提示したい。

紙背文書に従うならば、当該絵伝は本来四天王寺ではなく、河内国獅子窟寺の僧の発願により制作された作品であった。それが後代になり四天王寺の所有に帰すこととなり、画面に改変を加えて絵伝には新たな解釈が持ち込まれた経緯を想定できる。なお、上記注釈書の記述に基づく検討に加え、本作が四天王寺の所有に帰した時期や、本作の制作には真言律僧が関与した可能性についても私見を提示したい。